

かけはし

発行者 中野敏治
 神奈川県
 tnknkai@gmail.com

「縁のつながり」

数年前に「あこがれ先生プロジェクト」に出させていただきました。



この「あこがれ先生プロジェクト」へ出させていただいたのも、静岡県で行われた便教会で「縁を頂いた兵庫県にお住いの先生のご縁からでした。」

「あこがれ先生プロジェクト」に出させていただいた後の反省会で三重県四日市の方と「縁を頂きました。その場で名刺交換をし、それ以来、「ご連絡を取らせていただいています。」

この方は「もあはび」という会を知人と二人で企画・運営されていらっしゃる。

「縁がご縁を、つながりがつながりを作っていきます。」

このご縁から、先日、三重県四日市で開催された「もあはび」に出させていただきました。

この「もあはび」は、毎月講師を呼んで、少人数の集まりの中で講演を企画・運営しているのです。

先月で三十回、毎月、全国各地から講師を呼び、たった二人で企画をし、運営をしてきたのです。

その思いに感動をし、今までどこの会場でも話したことのない、私の幼児期からの話をさせていだきました。

「もあはび」通信のアドレスを紹介します。

<http://bn.merumo.ne.jp/backn>



「つっぺん」の朝会にドキ...

三重県に行くたびに お世話になってしまう先生がいます。今回も私のわがままで、つっぺんの朝会に連れて行っていただきました。



待ち合わせは桑名駅の改札口でした。なぜか桑名駅で電車を降りると小走りで改札口へ行きました。お会いするのがとても楽しみだったので。

十六時十分、居酒屋つっぺん桑名店に行きました。

なんとその場で、「あこがれ先生プロジェクト」で「縁を頂いた塾経営の先生にお会いしました。」ご縁の引き付けに驚きました。

つっぺんでの朝会の説明が始まりました。この説明から気迫

と元気を感じました。

「いよいよ、夢にまで見た「つっぺん」の朝会です。」

その場の気迫に負けそうになりながらも手を挙げると、私が夢を語ることになりました。

不思議なもので、怒鳴るように大きな声で夢を人に伝えました。

今までは考えられないことでした。

現実になるかわからぬ夢を人前で、しかも大きな声で伝えるなど、その場の自分が信じられませんでした。でも、怒鳴るように夢を伝えたあとはなぜか心がすっきりしたのです。

「夢」は実現するだろうかと考えているものではなく、

「夢」は語ってしまうものなのだと思いました。

語らなければ、動かなければ、何も始まりません。

感動しました。「つっぺん」朝会。

私が出会った大人たち(53)

教えられた

教師という仕事を



ある日の朝のこと、学校の正門周辺を掃除していたときのことです。

決まった曜日に、決まった時間に正門近くでお会いするおばあちゃんがいることに気が付きました。

ある時から挨拶を交わし、ある時から立ち話をするようになりました。

おばあちゃんは、毎週病院に行くために、決まった曜日に、決まった時間に学校の正門の前の道を歩いていたのです。

ある日のこと、いつも同じ時間に正門を通りかかっ



たおばあちゃんと立ち話をしました。

昔、教わった先生の話や戦争のころの話もされました。また、その当時の学校の様子や友達のことなども細かく教えてくれました。

そのおばあちゃんには、今でも忘れられない先生がいるというのです。

若いころ、みんなのあこがれの先生で、熱心に勉強も教えてくれたと言います。

先生は亡くなられ、今ではその先生の奥さんと、連絡を取って手紙のやり取りなどをしていると言います。今では、奥さんは高齢で外にも出られないと言われまして。

学生時代に教わった先生。その先生の奥さんと今になってもつながっているとき、教師と生徒とのつながりとはすごいも

のだと改めて感じました。

驚いたことに、そのあこがれの先生は、本校の校長をされたというのです。先生の写真があれば見てみたいと、当時は懐かしそうに話されるのです。

おばあちゃんに、医者へ行く時間がありました。まだ少し時間があるというので、すぐに校長室へ来ていただきました。

おばあちゃんは校長室の入り口とすぐにあこがれの先生の写真を見つけたのです。あの時のおばあちゃんの素敵な笑顔。

第何代の校長先生なのかと思っていましたら、驚くことにその校長先生は、第四代の校長でした。

おばあちゃんは白黒写真の第四代校長先生の写真をじっくりと見ていました。



校長室で、またいろいろな話が始められました。おばあちゃんは学校への思い出がたくさんあり、たくさん話をしてくれました。

正門付近で時々会話を交わしていたものの、お互いの名前は知りませんでした。お互いに名前も知らないのに、校長室で一緒に写真を見ていることに不思議さを感じませんでした。

私が名前を名乗り、名刺を差し出すと、おばあちゃんはカバンから取り出したノートの一ページを切り取り、そこに自分の名前と住所を書いて、私に差し出したのです。頂いたそのノートの一ページは、私にとって大切な名刺となりました。

玄関を出るおばあちゃんは、何度も振り返り、頭を深々と下げます。心温かい朝をむかえられました。大人も宝です。